

善導浄土教における三昧について

渡 辺 真 宏

浄土宗祖法然上人はその著『選択本願念仏集』第十六章段において、自らの偏依善導の理由を明らかにし、善導は三昧発得の人であるからだとされている。一般に三昧とは心を一つの対象に定着して散乱させないことをいい、その三昧を修行によって得、聖境をまのあたりに感じすることを三昧発得というが、善導の浄土教、すなわち善導の著作において、その三昧の問題がいかにとらえられているかを考察するのが本稿の目的であり、それによって、善導の修行した三昧の内容と、その結果得られた三昧発得の境地を説明するための一つの手がかりを得んとするものである。

善導の著作においては、三昧とそれを含む用語が多種使用されているが、なかんずく五部九巻中最初に撰述されたと考えられる『観念法門』において最も頻繁に使用されている。そこでまず、同書における三昧について考察してみるに、その劈頭には、「依_三観経_一明_二観_三念_四法_一」とある。この観念三昧、念三昧が各々い

なる行を修することによって到達されるものであるのか、ということが古来問題となっており、例えば、浄土宗三祖良忠上人の見解では、観念三昧は観念・観想を修することによって得られる三昧であり、一方、念三昧には、それらに加えて称名の要素も含まれているとされている^①。近年、小林尚英氏の説によると、『観念法門』に説かれる観念三昧・念三昧には同質的要素があり、両者ともに観念と称名の二要素が含まれているという^②。

そこで今、『観念法門』を再読しながらその問題を考察してみるに、同書の巻頭に掲げられた観念三昧の説明では、仏陀跋陀羅訳『観念三昧経』巻二観想品に依りつつ具体的に観念の法を説き、最後に、『観経』定善十三観によってこの法を修すれば、疑いなく浄土往生すると説くものである。この部分の所説を素直に読む限り、そこに称名の要素が含まれているとは認め難い。

次に、『観念法門』におけるこの巻頭部以降の『観経』な

らびに『観仏三昧経』の引用文を検討してみると、後半の五縁功德分中に『観経』真身観の引用文があり、この引用文では『観経』の所説をほぼ踏襲している。真身観所説の念仏三昧は、無量寿仏を観ずることによって得られる念仏三昧であり、したがって『観念法門』の引用文に説かれる念仏三昧もそれに順じ、観仏をその内容としているといえる。

さらに『観念法門』卷末結勸修行分中に『観仏三昧経』の引用文があり、その引用文中最初と中程に念仏三昧という用語があり、また最後に観仏三昧海と念仏三昧門という用語が並列的に出てくる。この引用文は『観仏三昧経』卷十観仏密行品の経文に忠実に引用がなされているので、同経のその後の内容を考えあわせると、本引用文中の念仏三昧・観仏三昧には称名の要素は包含されておらず、観仏・観想のみをその内容とすると思われる。

すなわち、『観念法門』卷頭所説の観仏三昧と、『観経』真身観ならびに『観仏三昧経』の引用文中の念仏三昧・観仏三昧はそのいずれもが観仏・観想の結果得られる三昧である。

一方、『観念法門』卷頭所説の般舟経に依る念仏三昧を検討してみると、先述した観仏三昧の法を説き終わると、『般舟三昧経』(一巻本、支婁迦讖訳)問事品を引用し、念仏三昧の法が示されている。ところで、同経に一巻本・三巻本の二種あるうち、盧山慧遠以来の聖道諸師がいずれも三巻本を使

用し、また善導の師道緯も、その著『安楽集』において、一巻本を念頭におきながらも基本的には三巻本を使用していると考えられるので、善導があえて一巻本を長文に渡って引用しているのは、一巻本のみが存在する「当念我名」という一句に特別の関心を抱いていたためであると思われる。その証拠に、『観念法門』卷頭の念仏三昧の説明には、「当念我名」の部分を含めてその前後、一巻本の経文を比較的忠実に引用しているのである。それゆえ、善導が『般舟三昧経』を用いて説いた念仏三昧には、観仏に加えて称名の要素が含まれていると考えられる。

この巻頭部以降の『観念法門』中の『般舟三昧経』からの引用・取意文を見てみると、五縁功德分において行品が取意され、経文にはない「至心観仏及口称心念」という語句が追加せられており、ここで説かれる念弥陀仏三昧にも観仏と称名の二要素が含まれていると考えられ、また同じく五縁功德分中に問事品行品が取意され、その取意文中に「心念口称」「心口称念」「声声相統」等の語句が見えることから、ここに示される三昧も観仏と称名の二要素を内容としているといえる。すなわち、『般舟三昧経』に基づく、あるいはそれらの引用・取意文中の三昧と念仏三昧には、観仏と称名の二要素が含まれるといえる。

以上の念仏三昧、観仏三昧の他に、『観念法門』には一行

三昧、定心三昧、口称三昧という用語が使用されており、それらの相互関係を以下考察する。一行三昧は五縁功德分中、見仏三昧増上縁を明す段の最後、『文殊般若経』からの引用文中に示され、『往生礼讚』前序にも同じ引用文が使用され、一行三昧が説かれている。そもそも一行三昧というのは、真如平等の理を觀察する瞑想法及びその境地を指し、般若經典に基盤を置くものであり、その代表が曼陀羅仙訳『文殊般若経』である。ところで同経下巻には、一行三昧を明かすのに二種類の記述がみられ、それらは一行三昧に入る方法について相違し、一は般若波羅蜜によって真如平等の理を觀ずる三昧で、他は称名念仏によって諸仏にまみえる三昧である。そのうち善導が採用したのは後者の一行三昧で、そのことが称名念仏への推移の上に一つの轉換の役割を果たすと、すなわち、觀を捨てて稱を立てるといふ立場が濃厚になったと考えられる。

次に定心三昧・口称三昧だが、これらも同じく見仏三昧増上縁を明す段に示されている。ここで『觀経』定善縁ならびに日想觀が取意され、この取意文以後、華座觀から散善九品まで取意され見仏三昧増上縁を明かす経証とされていることを考えると、定心三昧とは『觀経』定善十三觀に立脚する觀仏を、口称三昧とは散善九品に基づく稱名を各々その内容としてるように考えられる。

善導浄土教における三昧について(渡 辺)

以上、『觀念法門』を中心に、その中に説かれる三昧が様々ないかなる行の結果得られるものであるのかという観点から分類整理してきたのであるが、その問題が善導教学の集大成というべき『觀経疏』においていかに布行されているのかを考察してみるに、玄義分に「今此觀経即以觀仏三昧為宗。亦以念仏三昧為宗。」と説かれる。『觀経疏』の本文にはこれ以上の記述はなく、善導の真意は推測するしかない。良忠上人の見解に依るならば、『觀経』定善十三觀は草提の致請であり觀仏を宗とし、散善九品は仏の自説であり称名念仏を宗となすものであるという。したがって、『觀経疏』所説の觀仏三昧は定善十三觀に基づく觀仏を、同じく念仏三昧は散善九品に依る稱名を各々内容とするようにも考えられる。(以下略)

- 1 淨全四―二二二上。2 良忠『觀念法門私記』卷上(淨全四―二四一上)参照。3 小林尚英氏稿『善導の念仏三昧について』(『印仏研究』三三―)参照。4 淨全四―二二二上。5 淨全四―二二二下。6 淨全四―二二九上。7 淨全四―二二四上。8 淨全四―二二九上。9 淨全四―二二二上。10 淨全四―二二二下。11 淨全四―三五六上。12 大正八―七三一上。13 淨全四―二二〇下。14 淨全二―三下。15 良忠『玄義分伝通記』卷四(淨全二―一五四下―一五五上)参照。

△キーワード▽ 念仏三昧、觀仏三昧、『觀念法門』、『觀経疏』

(大正大学大学院)